

前回私たちは、ルダとヨッパの町で、主がペテロの行ったわざを通して、ご自分の救いのご計画を前進させられたことを見ました。主は、ペテロを用いて中風であったアイネヤをいやし、病気のために死んだタビタをよみがえらされることで、彼らはもちろんのこと、そのまわりにいた聖徒たちやまだ主を知らない人々に、ご自身の御力を現されたのです。その結果、多くの人が主に立ち返り、主を信じるようになりました。

さてペテロは、その後も、しばらくヨッパに留まります。そして、皮なめしのシモンという人の家に滞在していました。前は触れませんでしたでしたが、この「皮なめし」とは、動物の死体に触れるところから、当時、汚れた職業と見なされていたようです。ですから、ペテロが、そのような人の家に泊まったということは、彼が社会的偏見やユダヤ教の慣習に縛られていなかったことを証しています。そして、それと関連するようにして、今日のテキストの内容が記されているのです。異邦人宣教の始まりです。

異邦人宣教といえば、ペテロではなく、パウロをイメージされる方が多いと思いますが、初めに当たり、主は、十二使徒のリーダー的存在であったペテロを用いて、異邦人を救いへと導かれます。1-2 節「さて、カイザリヤにコルネリオという人がいて、イタリア隊という部隊の百人隊長であった。2 彼は敬虔な人で、全家族とともに神を恐れかしこみ、ユダヤの人々に多くの施しをなし、いつも神に祈りをしていたが」。

カイザリヤとは、地中海に面した重要な町で、ヨッパの北に位置し、そこにはローマから派遣された総督が駐在していました。イタリア隊とは、ユダヤの警備に派遣されたローマの歩兵隊のことで、通常、六百人の部隊がいたといわれています。その部隊を率いる百人隊長の一人が、このコルネリオでした。彼は敬虔な人で、全家族とともに神を恐れかしこみ、ユダヤの人々に多くの施しをなし、いつも神様に祈りをしていました。

ということは、彼はユダヤ教の改宗者だったのでしょうか？神を恐れ、「施しと祈り」というユダヤ教徒のような生き方をしていたわけですから、そう考えるのが自然でしょう。ただ「改宗者」ではなく、「敬虔な人」とあります。異邦人たちの中には、ユダヤ教の教理を受け入れ、宗教的慣習を守りながらも、男子が受ける割礼に対して抵抗をもつ人々がいたようです。そのような人のことをユダヤ教の観点から「敬虔な人」と呼んだということです。ですから、コルネリオもまた、割礼を除いては、ユダヤ人のようでありました。

3-6 節「ある日の午後三時ごろ、幻の中で、はっきりと神の御使いを見た。御使いは彼のところに来て、『コルネリオ』と呼んだ。4 彼は、御使いを見つめていると、恐ろしくなって、『主よ。何でしょうか』と答えた。すると御使いはこう言った。『あなたの祈りと施しは神の前に立ち上って、覚えられています。5 さあ今、ヨッパに人をやって、シモンという人を招きなさい。彼の名はペテロとも呼ばれています。6 この人は皮なめしのシモンという人の家に泊まっていますが、その家は海べにあります。』」。

「午後三時ごろ」とは、ユダヤ教徒の夕方の祈りの時間ですが、その時、彼は幻の中で御使いを見るのです。そして、ペテロを招くようにと御使いに言われるままに、自分の部下たちをヨッパへと遣わします。この所からも、私たちは、その救いのご計画を進めるために、主ご自身が先だって働いておられることを見ることができます。つまり、異邦人宣教の扉を開かれたのは、主ご自身であったということです。というのも、もし主が、幻の中で御使いによってコルネリオに語られることがなければ、この事は起こらなかったからです。

でも、主は、ユダヤ人ではないにも関わらず、主を恐れ、祈りと施しをもって主に近づくコルネリオに目を留められました。そして、この後、彼と彼の家族、また親しい友人たちを救われるのです。彼らは、全くの異邦人として最初に救われた人たちでした。ただ主の先だった働きかけが、もしコルネリオに対してだけであったなら、その救いの出来事が起こらなかった可能性も大いにありました。それゆえに、主は彼に対してだけでなく、ペテロに対しても働きかけられるです。

9-16 節「その翌日、この人たちが旅を続けて、町の近くまで来たころ、ペテロは祈りをするために屋上に上った。昼の十二時ごろであった。10 すると彼は非常に空腹を覚え、食事をしたくなった。ところが、食事の用意がされている間に、彼はうっとりとして夢ごちになった。11 見ると、天が開けており、大きな敷布のよう

な入れ物が、四隅をつるされて地上に降りて来た。12 その中には、地上のあらゆる種類の四つ足の動物や、はうもの、また、空の鳥などがいた。13 そして、彼に、『ペテロ。さあ、ほふって食べなさい』という声が聞こえた。14 しかしペテロは言った。『主よ。それはできません。私はまだ一度も、きよくない物や汚れた物を食べたことはありません。』15 すると、再び声があつて、彼にこう言った。『神がきよめた物を、きよくないと言ってはならない。』16 こんなことが三回あつて後、その入れ物はすぐ天に引き上げられた」。

旧約の律法には、「ある種の動物は、汚れているので食べてはならない」という規定（レビ11章）がありました。それは宗教的な意味においてですが、ここでのペテロの言葉からもわかるように、ユダヤ人たちは、これらの汚れた動物を決して食べなかったのです。ところが、主は「それを食べなさい」と言われたのですから、いくら空腹であつたペテロでも、驚きとともにそれを拒否します。「それはできません」とお断りするのです。ある意味では、当然の反応と言えます。でも、それを言われたのは、人ではなく、主でした。主が命じられたことを拒むことは果たして正しいことでしょうか？

主はペテロに言われました。「神がきよめた物を、きよくないと言ってはならない」と。「そんなことが三回あつて後、その入れ物はすぐに天に引き上げられた」とありますから、ペテロは最後まで食べようとせず、三回とも拒んだのでしょう。そこでペテロは、その幻について、どういうことだろうかと思ひ感うわけですが、ちょうどその時、コルネリオから遣わされた人たちが、彼の泊まっていたシモンの家に到着します。ペテロがその幻についてさらに思ひ巡らしていると、今度は御霊を通して主は語られたのです。

19-20節 「ペテロが幻について思ひ巡らしているとき、御霊が彼にこう言われた。『見なさい。三人の人があなたをたずねて来ています。20 さあ、下に降りて行って、ためらわずに、彼らといっしょに行きなさい。彼らを遣わしたのはわたしです』」。なぜ御霊は、ただ「いっしょに行きなさい」ではなく、「ためらわずに」と言われたのでしょうか？「ためらう」理由がそこにあつたからです。それが知人であれ、知らない人であれ、突然の来客というのは、応答に困る時があります。今のように電話やメールがあればまだしも、当時そういう物はありませんから、ペテロにしてみたら、それは突然の訪問であつたわけです。

では、その突然性が、ペテロにとって、コルネリオの招きに応じるのにためらう理由だったのでしょうか？むしろ、それは彼らが異邦人であるということにありました。なぜなら、それまでユダヤ人と異邦人とは交わりを持たなかつたからです。それゆえに、この主の語りかけなしに、ペテロがコルネリオの部下たちを家の中に入れることも、彼らと共にカイザリヤに出向くことも考えられないことでした。しかし、主は、「彼らを遣わしたのはわたしです」と御霊によって語られることで、ペテロを遣わされるのです。

私たちは、ペテロが見た幻を通して、彼が汚れた動物を食べるのをためらつたことをすでに見ました。主は、それを通して、食べ物についてペテロに教えられたのでしょうか？いいえ。それは、ユダヤ人たちにとって汚れた、きよくない者、つまり、偶像礼拝者として軽蔑していた異邦人に対して、ペテロの心を開くために、主はこの幻を見せられたのです。それに対してペテロは、それまでのユダヤ教の教えや習慣に従つて、「自分は汚れた物は食べられません」と拒みましたが、主はご自分がきよめたものは、きよいことを教えられたのです。

そして、それは実にペテロをして「ためらわずに」、コルネリオのもとに行くためでした。彼の中には「異邦人は汚れている、きよくない者」というユダヤ人たちのもつていた考えが強く残つていたからです。ですから、いくらコルネリオが、「神を恐れかしこみ、ユダヤの全国民に評判の良い人である」と彼の部下たちが説明したとしても、彼が異邦人である限り、異邦人と交わりをもたないユダヤ人のペテロにとっては、それはためらうものでした。しかし、主はペテロにもこのように働きかけることで、そのためらいを除かれたのです。

いかがでしょうか？もしあなたがペテロの立場なら、「わたしがきよめた物はきよいから、食べなさい」と言われて、何のためらいもなく、食べたと思ひますか？「空腹だったら、何でも食べます」と言われるのでしょうか？それが、これまでの自分の生き方と正反対のことだとわかつていたとしても、主がそう命じられるという理由で、あなたはそれまでの考えや生き方を捨てられますか？ペテロのように何度かは拒むかもしれないけれども、その後は、主に聴き従ひますか？

私たちをして、主の恵みにより、また信仰によって救われるというのは、主のものとされるということです。それまで自分中心に生きていた古い自分は死んで、キリストを中心とした新しい生き方をする神の子どもにされたということです。でも、そのことは頭ではわかっているつもりでも、実際の生き方を通して証できるかという、なかなかそうもいきません。主イエスを信じた後も、それまでの古い自分、その自分をもつ偏見をなかなか捨てられないのです。それゆえに、理想と現実の狭間で、私たちは自分の罪（自己中心性）と向き合うことになり、それによって心の葛藤を覚えるのです。

では、そのように葛藤を覚えることは良くないことなのでしょうか？ペテロが汚れた食べ物を前にためらいを覚えたことはダメだったのでしょうか？むしろ、主は、彼が「それはできません」と拒むことを知っておられたからこそ、異邦人が訪ねて来た時にも、彼がためらうことを知っていたからこそ、幻を通して彼に語られたのではないですか？つまり、主に語られた時、ためらいや葛藤を覚えること自体は悪いことではありません。でも、それを通して、最後まで自分の考えを押し通すのか、それとも、主の前にへりくだり、主に従うのか、それが大きな違いとなるのです。

私たちはみな、自分のうちにある罪や汚れは小さいことに見え、でも他者のそれは大きなことに見えるものです。それゆえに、「あの人はどう」「この人はどう」と簡単に他者を汚れた者、きよくない者と言ってしまうことがあると思うのです。でも、全く汚れのない主イエスの前に、汚れのない人、全くきよい人など一人もいません。私とあなたを含むすべての人は、主の前に汚れた者、きよくない者です。それゆえに、父なる神様が、御子イエスに、「彼らのために苦しみ、十字架にかかり、その死をもって彼らを罪の中から贖いなさい」と言われた時、「そんなことはできません」と主には拒むことができたはずで

でも、主イエスは「ためらう」どころか、全くその反対のことをして下さいました。主は、汚れた、きよくない私たちのために、自ら進んで十字架の道を歩いて下さったのです。それはご自身の流された血をもって私たちの汚れを洗いきよめて下さるためですが、それで終わりではありません。三日目によみがえり、天に昇り、約束の御霊（助け主）を注ぐことで、ご自分を信じるすべての者が、もはや古い者としてではなく、新しく神の子として義の道へと進めるように主はして下さいました。そこにはもはやユダヤ人や異邦人といった隔ての壁はありません。御子を信じる者は、みな神の子どもであり、天の御国という永遠の祝福を相続する者です。主がきよめたなら、きよいのです。さらに主の御心を求め、主に従うお互いであろうではあませんか。